

Good
for
Anything,
Best
at
Everything



ロンドンのジャーミン・ストリートに「紳士の小道具」専門店が続々とオープンし始めたのは、19世紀半ばである。

TPOに応じてスーツを「正確に」着分けることができるかどうか、それぞれのスーツにもっともふさわしい小物を使い分けることができるかどうかが、紳士とみなされるための大基準となった時代である。だから、クローゼットのなかには、時間帯と用途に応じたスーツとそれに合わせる小物類が各種ぎっしりと取り揃えられていなければならなかったのである。

と聞くとかなり面倒そうであるが、逆にこういう時代においては、「馬子にも衣装」のからくりが成立した。紳士としての中身のほうは若干あやしい男でも、それなりの各種スーツと小物類さえ間違えな

文=中野香織
Text by Nakano Kaori

汎用性の
桃源郷

く押えておけば、世間の目をある程度はくらますこともできたのである。

20世紀に入り、TPO遵守の精神は、かつてほどの厳密さではなくなつたにせよ、いまだ連絡と受け継がれてはいる。しかし、カジュアル化・合理化の波を受け続けて、男が最低限のマナーとして持つべきスーツや小物の種類は格段に少なくなってきた。

そして21世紀を目前にした今、一着ではどんなTPOをこなせるようなスーツが登場はじめているのだ。

「用途が広い」「何にでも使える」という汎用性を売り物にした製品には、従来、あまり芳しくない評判がつきものだった。すなわち、多芸は無芸

Good for anything, best at nothing

のマイナス・イメージである。ところが今、あえてこの汎用性の壁に挑戦するようなスーツが続々と登場しているのである。

肩パッドや裏地を極力省略したナチュラルなデザインとスタイリッシュなモード感を両立させた、仕事着としても社交服としても、時間帯を問わず使えるスーツ。

ただし、である。

この種のスーツにおいては、「馬子にも衣装」のからくりがまったく通用しない。鎧のようにすっぽ

りとまとえばそれなりに通用する、という類いのスーツではないのである。ほんやりとしたまま着れば、たちまち汎用性の罠に陥り、スーツも着手も中途半端なまま生かされないだろう。アピールするイメージを服や小物の力だけに頼るような甘えは許されない。着る人の自覚と責任と演出力が求められる服なのだ。

こんなスーツが登場してきた背景は何なのか?

不景気だから? 汎用性が経済的? たしかにそれもあるかもしれない。

しかし、そんな一時的な経済上の理由以上に、ある大きな時代の潮流がそこに働いているように見えてもならない。

たとえば、企業がかつてのような手とり足とりの社員教育をしなくなり、代わりに社員ひとりひとりが自分の能力を高める責任を持たねばならなくなってきたこと。

あるいは、外資系のエアラインなどで見られるこんな風潮。すなわち、「当機はただいま機体整備をおこなっております。あとしばらくお待ちくださいませ」などと曖昧な言葉で乗客をなだめすかす代わりに、「計器が正常に動作しません。ただいま原因究明と対策をおこなっておりますので、離陸まであと数分かかります」と乗客に具体的に状況を報告し、乗り続けるか降りるかはすべて乗客の自己責任にまかせるという考え方。

こんなもろもろの現象から透けて見えるものは、何だろう。

消費者や雇用者や乗客という「あなたまかせ」になりがちだった立場にすら一切の甘えを許さない、「汝いかなる場面においても主体的責任者たれ」という時代の要求ではないだろうか。

同じような現象が、クルマの世界でも見られる。たとえば、エスティマがそうだ。

シャープで近未来的なデザインなのにどこか安心感のある、シティ・ビークルとしてもファミリー・バンとしても乗ることができるクルマ。作り手が提示する枠がかなりゆるやかになっている分、乗り手の意識次第で、いかようにも通用する。

スーツやクルマの多様な可能性を最終的に選んで生かす責任が、作り手ではなく、着手や乗り手自身に求められるという時代。

気後れする必要はない。むしろ非常にスリリングな挑戦を楽しめる時代になってきたのだ。野心的な着手あるいは乗り手が、汎用性のあるスーツやクルマの長所をあらゆる面にわたって引きだすことによって成功したとすれば、それこそ、多芸で万能

Good for anything, best at everything

という、汎用性の桃源郷のような境地に至ることも夢ではないのだから。

[なかの・かおり]

東京大学教養学部非常勤講師
東京大学文学部および教養学部卒業。
東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得。1989年、1994年英國ケンブリッジ大学客員研究員。現在、ファッション史、映画、イギリス文化史に関する評論、エッセイを中心に執筆活動をおこなっている。訳書にA・ホランダー『性とスーツ』(白水社)、著書に『スーツの神話』(文春新書)などがある。
「雇用者や乗客に求められる自己責任の場合、言うはかっこいいけれど、実際に果たすとなるとかなりエネルギーを消耗する。しかし、消費者に求められる自己責任には、むしろ建設的な楽しさが伴う。実際に「エスティマ」に3日間乗って温泉地とタウン両方を走ってみたわたしは、多くの可能性を秘めたクルマから多彩なエネルギーを与えてもらったような気分になった」

右／サルトリオのスーツ15万円、バルバのボタンダウンシャツ1万9000円、プレミアータ ウォモのシューズ4万4000円(すべてインターナショナルギャラリー・ビームス Tel.03-3470-3948)左／ジャケット9万6000円、セットアップのパンツ4万3000円、シャツ2万3000円(すべてチヴィディーニ/チヴィディーニジャパン Tel.03-3794-6260)プレミアータ ウォモのシューズ4万7000円(インターナショナルギャラリー・ビームス Tel.03-3470-3948)サンダル2万円(ペルソール/ミラリージャパン Tel.03-3780-5670)クルマ／エスティマL(4WD エラス 8人乗り)315万円(トヨタ／詳しくは全国カローラ店の店頭まで。<http://www.toyota.co.jp/ESTIMA>)

